

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言 楠見 孝 副研究科長 ②

研究ノート ③

教員から	安藤 幸	グローバル教育展開オフィス 講師
院生から	豊原 響子	博士後期課程1年
社会人院生から	山田 勉	博士後期課程3年
留学生から	王 令薇	修士課程1年

活動報告 ⑤

臨床教育実践研究センターから
千葉 友里香 附属臨床教育実践研究センター 特定助教

教育実践コラボレーション・センターから
福井 佑介 教育社会学講座 講師

グローバル教育展開オフィスから
安藤 幸 グローバル教育展開オフィス 講師

E.FORUMの取り組み ⑦

西岡 加名恵 教育・人間科学講座 教授

トピックス ⑧

グローバル教育展開オフィス 研究プロジェクトについて
稲垣 恭子 研究科長

平成30年度教育学研究科長賞 ⑨

岡村 裕美子 博士後期課程3年
河村 悠太 博士後期課程3年

オープンキャンパス2018 ⑩

大学院・学部学士入学 入試説明会

事務室から 小西 博之 事務長 ⑪

森常 恭平 教務掛員

図書室から 吉田 弘子 図書掛長

諸記録 ⑫

①おもな出来事 ②人事異動 ③外部資金受入 ④教育学研究科・教育学部基金

諸報 ⑭

新任教員・事務職員紹介



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。



大学教育とAI: 21世紀型スキル育成のために

副研究科長 楠見 孝

人間と人工知能(AI)がともに進化する教育を実現するには、それぞれを個別に探究するだけでなく、両者の関係を考えるという心理学、人工知能学、教育学などの研究が重要である。さらに、未来を生きる学習者がAIを能動的・協調的に活用するために、21世紀型スキルを育成する教育が鍵であると考えられる。

21世紀型スキルは、国際プロジェクトATC21S (Assessment & Teaching of 21st Century Skills) が提唱したスキルで、4つのC (Critical thinking, Communication, Collaboration, Creativity) が強調されている。これら4つのスキルを、大学においてAIを活用して、いかに育成できるかについてここでは考えたい。

第1に、批判的思考力(Critical thinking)の育成には、批判的思考のプロセスである[情報の明確化]、[推論の土台の検討]、[推論]、[意思決定]などについて、AIを活用して教育することが考えられる。具体的には、AIによって、あるトピック(例:少子高齢化への対策)に関するインターネット上の膨大な情報を、賛否や選択肢、それらを支持する証拠に基づいて明確化する。ここでは、論証マップ作成ツールを使って、議論を明確化する。さらに、情報の信頼性評価システムを使って、推論の土台となる情報信頼性をチェックしたうえで、複数の選択肢を導出する。ここで大切なことは、学習者が、AIによる出力を自身の思考と照らし合わせて吟味して、価値判断や意思決定することである。人間の思考には、誤りや偏りなどの限界があることは心理学で明らかにされている。しかし、AIにも同様の限界があり、また、常にAIを利用できるわけではない。したがって、学習者がAIの支援がなくても批判的思考を実行できるようなスキルを身につけることが目標となる。また、AIの活用をめぐる倫理的な問題は、批判的思考教育で取り上げるべき重要な課題である。

第2は、アカデミックな外国語コミュニケーション(Communication)能力の育成である。たとえば、(a)ライ

ティングについては、前述の論証マップに基づいて論文を作成し、構造と文法の評価のフィードバックをAIから得て、修正を重ねる。そのプロセスで、自らの弱点を知り、スキルを向上させることができる。(b)スピーキングについては、対話ロボットや仮想空間上のアバターを相手に、恥ずかしがることなく話しかけたり、聞き取る練習をして、フィードバックをうけながら、能力を向上させる教育プログラムが考えられる。

第3は、人同士が協働し、さらに、人とAIが協働(Collaboration)するためのスキルの育成である。たとえば、他国の人と討論やプロジェクトベース学習を行うことを支援するバーチャルな協調的遠隔学習環境が考えられる。ここでは、文化や価値観の異なる他者とともに、世界共通の問題解決に取り組む。たとえば、チャットなどのテキストベースのコミュニケーションツールを用いたり、先に述べた論証やライティング支援ツールを用いて、外国語による対話をサポートすることが考えられる。さらに、議論の経過をテキストにおいて振り返ることで、討論スキルを高めることができる。

第4は、最も難しい創造的能力(Creativity)の育成である。創造的能力の教育やAIによる支援には限界がある。しかし、創造には、過去の知識の探索と変換、そこから生成のプロセスがある。そうしたプロセスを促進するために、AIの利活用が考えられる。たとえば、先に述べた情報の信頼性評価システムを活用することで、インターネット上の広範な集合知や先行文献・資料、データを探索し、論証支援システムによって、知識を結合・変換する。そして、ゼミや研究室では、学生と教員が、AIによる出力をたたき台にして、相互作用し、知識を創造することが考えられる。

今後の大学教育においては、これらの21世紀型スキルを、AIを活用した学習環境を通して学習者が獲得することを支援すること、そして、よりよい世界を築くために、市民、専門家、イノベーターなどを育成することが大切であると考えられる。

教員から

グローバル教育展開オフィス
講師

安藤 幸



心の拠り所としてのホーム

16年間暮らしたアメリカを離れ、日本に帰国して3年半になる。帰国してからの1年は新しい生活に馴染めず、毎日夜になるとメソメソ泣いていた。30代半ばの大人が、である。

アメリカに飛び出した大学生の私には、怖いものなど何もなかった。カルチャー・ショックを経験した覚えもない。学生として20代をフロリダ州タンパ、ニューヨーク州オルバニー、そしてテキサス州アーリントンで過ごし、30歳で大学院を修了。その後、ペンシルバニア州フィラデルフィア郊外にある私立大学の教員になった。外国人、移民として生きるのには、それなりの苦労がある。理不尽なことも日常茶飯事だったが、どんなことも人生経験だと前向きに歩んできたつもりだ。

それなのに、「祖国に戻る」、そんな単純そうなことが、なぜこんなにも難しいのか。

これまで慣れ親しんだ祖国から移住先社会への移動には、心理社会的な混乱を伴うとされる。国際的に移動する人々は、祖国の客観的な見つけ直しと移住先社会への適応を経験することになる。そのような過程を経て、移住先社会が新たな「ホーム」に変容していくようであ

る。いずれ祖国（ホーム）に帰る心構えをしながら海外生活をしている長期滞在者とは違い、移民は祖国と移住先社会の2つのホームの間で揺れ動く。それゆえに、移住先社会に腰を据えて生活している移民が祖国に帰国する時には、社会復帰がより難しくなるのであろう。

帰国したばかりの頃は、アメリカというホームを手放すことに対する不安や、自分の中にあるノスタルジックな日本と現実との齟齬に対して苛立ちを感じていた。今では日本の生活にも慣れ、居心地のよいものとなった。3年半という時間を経てようやく、アメリカでの日々が、心の拠り所としてのホームに変わりつつある。

写真は、テキサス、ペンシルバニア、そして日本へと移住を共にしてきた私の愛犬である。それぞれの場所にすんなりと適応し、それなりに楽しそうにしている。そんな姿を見ると、私ももう少し柔軟な心を持ちたいと思う。



院生から

博士後期課程1年

豊原 響子



ようやくスタート地点

大学院で臨床心理学を専攻していると言うと、「いつから／どうしてそういうことに興味湧いたの?」とよく尋ねられる。今思えば、高校生のわたしがこころの問題に興味を持った背景には、成果主義的な社会に対する反発心と、皆が“普通”に出来ていることについていけないしんどさがあったように思う。端的に言うと勉強が全然出来なかったのだ(今でも試験は大嫌いだ)。

学部生の頃は、様々な縛りから解放された喜びから大いに遊び、あちらこちらで様々な人と関わりながら、講義や実習を通じて心理学の基礎を学んだ。大学院への進学は高校時代から心に決めていたので、修士課程に進んだときはようやくここまで来たと身が引き締まる思いだった。実際、大学院ではより専門的な内容の授業・実習・演習に取り組むようになり、心理臨床の実践的な活動に携わる機会も時間も一気に増えた。中でも実践の場では、生身のひとを前にひとりの人間として対峙することの責任の重さを痛感しながら、どんな本より

多くのことを日々学んでいる。苦しいこともあるけれど、援助者であるはずの私の方が力を貰っていることも稀でなく、時に涙が出そうなほど心を揺さぶられることもある。今年はこうした様々な体験から学んだことをなんとか言語化し形にしようと考えたが、言うは易く行うは難しとはこのこと、大嫌いな試験勉強と並行して研究をまとめるのは至難の業だった。やっとの思いで参加した学会では多くの出会いと発見に恵まれたが、同時に今後の課題も見えてきた。修論を提出したらようやくほっと一息つけると思っていたけれど、まだまだ道半ばのようだ。

思い返せば、大学院進学以降は毎年「ようやくここがスタート地点だ」と思っている気がする。現段階では心理職の資格も未取得であり、実際はまだスタート地点に立ってすらいらないのかもしれない。これからも初心を忘れず、臨床実践と研究活動を両立出来るよう日々努力していきたい。

社会人院生 から

博士後期課程3年
山田 勉



高等教育の質保証－実務から研究に至るまで－

連携教育学講座(高等教育学コース)で「学生参加による高等教育の質保証」について研究をしています。

現職の大学職員です。立命館大学の大阪いばらきキャンパスで、MOTとMBAという二つの独立研究科の事務長をしています。2006年に、認証評価機関である大学基準協会に出向したことから、高等教育研究に興味を持つようになりました。

出向は3年におよび、50校以上の大学評価に携わりました。大学に戻ると、早速、大学評価室の担当になりました。機関別評価や専門職大学院評価に、今度は申請者として対応する一方、6年制薬学教育の第三者評価機関の立ち上げをお手伝いしたり、その評価委員会委員に就任したり、質保証実務との関わりは今日も続いています。

そうしたなか、『大学における内部質保証の実現に向けた取り組み』(共著)という査読論文を2011年に執筆したことが、研究活動に入るきっかけとなりました。とはいえ、研究者としての訓練を受けたこともなく、『質

保証は絵空事か：第2期認証評価実践上の課題』(単著)という論文を次書き終えたころには、大学院進学の必要性を感じるようになりました。

立命館大学には、職員が休職をせず仕事を続けながら大学院生となることを認める制度があります。恐らく、大学の前身が勤労者のための夜学だったからでしょう。私も許可を得て、2014年から教育学研究科で研究を始めることができました。

修士課程では、「消費者としての学生」の考察を中心に研究テーマに取り組み、博士後期課程では、学生が何に・どのように参加すれば、高等教育の質保証につながるのかについてさらに考察を深めています。

50代で研究を志す社会人にとって、心から尊敬できる指導者に恵まれたことは、まさに幸甚の至りです。未筆ながら、いつも親身にご指導くださる松下佳代先生と高等教育研究開発推進センターの諸先生方に、厚く御礼申し上げます。

大人のまなざし

留学生から

修士課程1年
王 令薇



私は、去年大学を卒業して来日しました。日本のテレビ番組に興味があり、NHKの社会教育番組「中学生日記」を研究対象にしています。この番組は私にとって、中学時代の勉学生生活を思い出させるものになりました。

中学の担任の先生はクラスの生徒たちの出来事を匿名にしてブログに書くことがありました。偶然、私は先生のブログを見つけて、それから定期的に読むことになりました。今から振り返ってみると、やはり違和感を覚えるのですが、あの頃の私は、先生の教育に対する熱心さに感心しました。しかし、先生はクラスについて40本ほどの記事を書いていたにもかかわらず、私のことについて書いたことは一度もありませんでした。理由は明確ではありませんが、私はあの時、成績がトップであるということもなければ、かといって性格は大人しく校則を犯したこともなかったため、先生から見れば、恐らく影が薄かったのでしょう。大人が子どもを見る眼差しは面白いものだと思います。

この夏休み、1980年代から2010年代にかけて放

送された「中学生日記」のエピソードをNHK大阪放送局で見えてきました。受験戦争や管理教育などに直面する中学生たちの姿は生々しいものです。しかし、この番組の一番面白いところは、中学生たちよりも、むしろ大人たちがどのように青少年問題を捉えているのかにあると感じました。例えば、1980年代には不登校は生徒たちの意志の弱さに起因すると考えられていました。一方、1995年以降、大人たちは不登校の原因がもっと複雑であると考えようになり、「理由なき不登校」という言葉が作られました。大人がどのように青少年問題を意味付けるのかは、時代によって変化するものだと考えます。

今の若者は上の世代と比べて覇気がないと、大人たちに批判されることがあります。しかし、「中学生日記」に表れる青少年問題の捉え方の変遷が示しているように、大人の眼差しを批判的に認識することも大切でしょう。

附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター 特定助教 千葉 友里香



今年で開設22年目となる臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動しています。心理臨床実践活動においては、スタッフ一人ひとりが目の前にいる来談者に真摯に向き合いながら、同時に、心理教育相談室という場のあり方についても細やかに考えながら、心理教育相談室での相談活動にあたっています。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催しています。

今年度も8月に、第22回リカレント教育講座を開催いたしました。今年度は「教師のメンタルヘルス」をテーマとし、シンポジウムでは、学校現場での臨床活動に造詣の深い2名の先生方をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話いただきました。当日は、学校教諭や臨床心理士など、約70名の方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。

また9月より3カ月間、ルーベン大学のルディ・ベルモート先生に客員

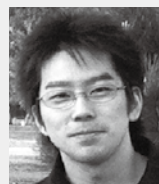
教授としてお越しいただき、ピオンによる概念を中心とした精神分析、精神分析的な心理療法に関する講義や臨床事例の検討などの面で、ご指導をいただいています。11月には、「不可知なもの—ことばによる思考を超える心の機能と心の変化—」と題した公開講座を開催する予定となっており、すでに多くの方から申込みを頂いています。

また東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続して行っています。今年度は7月下旬に、理学研究科附属花山天文台との共催により「花山天文台ツアー&宇宙船を作ろう!」を開催し、さらに12月には「京大探索クリスマス編&和・話・輪の会」を予定しております。震災から時間が経つにつれ、参加者それぞれが抱えておられる困難の形も個別化してきている状況がありますが、これまでの参加者同士のつながり、スタッフとのつながりを大切にしながら、新たなつながりの輪を作っていく機会としていきたいと考えております。

教育実践コラボレーション・センターから

教育実践コラボレーション・センターと「力動的秩序形成」

教育社会学講座 講師 福井 佑介



当センターでは、さまざまなフィールド実践との連携・協力を軸に活動を行っています。一方で、共通のプロジェクトとして進めてきた科研費研究に、昨年度末で一つの区切りを迎えました。

この研究の中心にあるのは「力動的秩序形成」という概念でした。ある秩序にゆらぎや破壊が生じた際に、旧来の秩序への回帰に向かう方向よりも、個別の状況や事情に応じた新しい秩序形成のプロセスに注目するということです。この議論の前提には、特定の「正しい秩序」を設定せずに、秩序を動的なものとして把握する見方があります。この秩序形成は学校教育、家族関係、地域連携、国際交流等のさまざまなフィールドでみられ、個別性に留意しつつ、その特徴、空間の在り方、そこでの支援を検討してきました。例えば、完治が困難な大怪我をした人に、(以前の状態への回復を目指す医学のアプローチとは別の)その後の人生での充実に向けた支援を行う事を想像すればよいでしょう。

昨年度から当センターに所属する新参者の私は、公開シンポジウム「現代社会に求められる新たな秩序を考える」(2018年3月3日)で報告を聞く中で、専門の図書館史を連想しました。60年代後半からの質的転換(資料保存中心の考え方からサービス中心の利用者志向へ)は、図書館関係者による極めて自発的な、創造的破壊を伴う秩序形成でした。一方、近年の「新しい」図書館をめぐる言説では、社会の要望や環境の変化といった外的要因の比重が大きいです。資料や情報を扱う社会的機関という本質を見失うことなく次代の図書館を考えるにあたり、基礎研究で貢献したいという気持ちを新たにしました。

区切りを迎えた当センターも転換期にあります。実践との連携や知的コラボの会はそのままに、フィールド研究の強みを活かして、異分野の融合や組織的な対応の調整といった役割を担おうとしています。この力動的秩序形成の先でも、更なる知を生み出すことでしょう。

Bangkok Forum 2018に参加して

グローバル教育展開オフィス 講師 安藤 幸



10月24、25日にタイ・バンコクで開催されたBangkok Forum 2018(以下、フォーラム)に参加しました。このフォーラムは、「持続可能なアジア」を創造するため、国境を超えて学際的な対話や議論、実践を促進するためのプラットフォームで、チュラロンコン大学が主導しています。開会式は、同国のマハー・チャクリー・シリトーン王女ご臨席のもと執り行われ、アジアを中心とした大学の関係者のみならず、環境、人道支援、宗教などさまざまなフィールドの第一線で活躍する実践家ら約1,000人の参加者が、アジアの未来について語り合う2日間となりました。

東南アジア10カ国による地域共同体(ASEAN)内には、世界総人口の8%にあたる約6億4千万人が暮らしています。ASEANは、政治体制、民族、宗教、環境など、あらゆる面において多様性に富んだ地域です。急速な経済成長の中にあり、めまぐるしい変化を遂げるASEAN地域において、統一性のある持続可能な発展とはいかなるものかが

フォーラムの大きなテーマであり、市民としての社会的責任とそれら育成に関わる大学の役割について、連日活発な議論が交わされました。

フォーラムへの参加は、よりよい社会を構築していくために、大学とフィールドがどのように連携していくべきか、改めて考えるきっかけとなりました。

本研究科の目的に、「地球社会の調和ある共存に貢献できる人材の育成」があります。今年度後期に新規開講されたグローバル教育科目である「国際インターンシップ」と「国際フィールドワーク」はまさに、学生と国内外の国際機関や研究機関などを含むフィールドをつなぎ、学生が個々の研究テーマについて広い視野を得ることで、新たな課題や問題解決法の発見を促すものです。グローバル教育展開オフィスでは、Bangkok Forumを始めとする国内外のネットワークと連携し、学生の教育研究をより一層支援していきます。



開会式は厳粛な雰囲気にも包まれた



セッションでは活発な議論が行われた

平成30年度「全国スクールリーダー育成研修」

教育・人間科学講座 教授 西岡 加名恵

E.FORUMでは、2018年8月17・18日の2日間にわたり研修を開催しました。北は宮城県から南はシンガポールまで計188名(1日目169名、2日目161名)の教職員や教育委員会関係者などが参加してください、とても活気のある会となりました。

1日目の午前から午後の前半にかけては、分科会A「カリキュラム設計入門——教科におけるパフォーマンス課題づくり」(西岡加名恵教授)、分科会B1「若い教師に伝えたい授業づくりの発想」(石井英真准教授)、分科会B2「カリキュラム・マネジメントとの向き合い方」(服部憲児准教授)を提供しました。午後の後半は稲垣恭子研究科長の挨拶に続き、齊藤智教授による講演「ワーキングメモリを鍛えることができるのか?」が行われました。

2日目は、西岡加名恵教授、石井英真准教授の進行のもと、シンポジウム「カリキュラム・マネジメントをどう効果的に進めるか」にて、赤沢早人教授(奈良教育大学)、盛永俊弘特任教授、田中容子特任教

授にご報告いただき、活発な議論が行われました。また、午後は「各教科等における『見方・考え方』をどう育成するか——パフォーマンス評価の活用」と題する教科等別分科会において、学習指導要領改訂の動向をも踏まえつつ、各参加者の実践プランなどをグループでじっくりと検討し、議論を深めました。

なお、今年度の教科等別分科会は、例年にも増して多くの参加申し込みをいただき、嬉しい反面、定員オーバーによりお断りせざるを得ない状況となりました。E.FORUMは、できる限り多くの皆さまに参加していただけるよう工夫をしつつ、引き続き、実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしく願いいたします。

※E.FORUMの活動については、下記もご覧ください。

<http://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>



講演する服部准教授



講演する齊藤教授



熱心に聞き入る参加者の皆さん



シンポジウム進行役
(左より西岡教授・石井准教授)



シンポジウム登壇者の先生方
(左より田中特任教授・盛永特任教授・赤沢教授)



教科等別分科会の様子

グローバル教育展開オフィス 研究プロジェクトについて

研究科長 稲垣 恭子

グローバル教育展開オフィスの構成は、「創生開発ブランチ」と「国際教育支援ブランチ」の2つの部門を置き、専任の教員2名を中心に研究科全体でサポートして運営する体制になっています。現在、本年2月に着任した安藤幸講師を中心に、新しい海外先との連携協定、連続講演会の開催、大学院教育科目（グローバル教育科目）の開設などの事業を進めており、新しく教授1名も着任する予定になっています。

「国際教育支援ブランチ」での活動として、学術交流面では、ハワイ大学、オックスフォード大学と新規に協定を結び、教育・院生の研究派遣等の企画等を始めています。来年度には、オックスフォード大学において、ニッサン日本問題研究所と本研究科共催のシンポジウムを開く予定で、現在準備を進めています。また、東アジア、アセアン地域を含めた研究・教育の拠点形成に向けて情報収集や折衝を進めています。

また、教育面では、連携先の教員と本研究科教員が合同で行う国際合同授業や、院生の研究テーマにそった国際フィールドワーク、国際インターンシップなど、新設の授業科目の運営に携わっています。その他、院生の国際学会や研究集会への参加への補助も行うなど、次世代を担う幅広い研究者・教育者の育成に繋がっていきたいと思っています。

「創生開発ブランチ」での活動として、『日本型』教育文化と知の継承の理論的・実践的研究』をテーマとした研究プロジェクトをスタートしました。知のグローバル化やフラット化が進むなかで、いかに知を継承していくかという問いは、教育研究の核となる重要な課題です。このプロジェクトでは、教育を支えてきた文化のしくみをグローバルな視野から問い直すことによって、欧米型の教育モデルとは異なる教育の新しいグローバル・スタンダードとそれに基づく教育モデルの可能性を理論・実践の両面から探究し、その成果を国内外に発信していくことを目的としています。

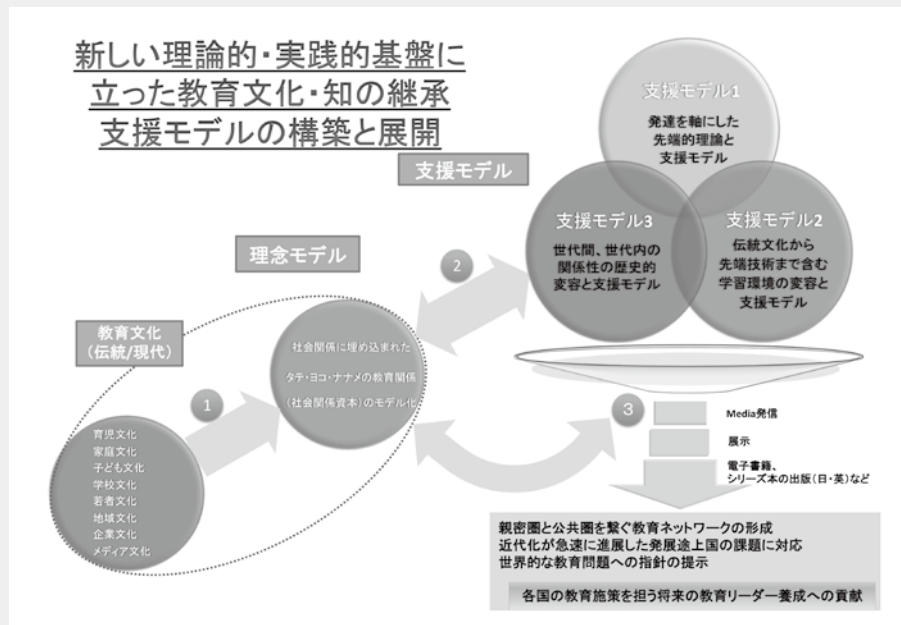
プロジェクト全体のコンセプトや計画について説明会を開き、総括班

のラブラリー准教授によるレクチャーを行いました。まず現在の教育をめぐるグローバルな状況として、世界的には教育水準・評価基準が北米・西欧の専門家によってリードされる状況があること、その一方で、国内的には実践レベルに特化したEdu-Port(日本式教育の輸出)の活動が行われていることが指摘されました。本プロジェクトは、そのいずれの立場からも距離をとり、「方法としての日本、方法としてのアジア」という視点から、新しい理論的・実践的基盤に立った教育文化・知の継承モデルの構築をめざすというポジションが示されました。現在、3つの研究グループを立ち上げて、教育学研究科の教員の各分野を基盤としつつ、「発達を軸にした先端的理論と支援モデル」「伝統文化から先端技術まで含む学習環境の変容と支援モデル」「世代間、世代内の関係性の歴史の変容と支援モデル」など、テーマ別の研究を進めています。

また、このプロジェクトをスタートするにあたって、「グローバル時代における『日本型』教育文化のあらたな可能性」(A 'Japanese Model' of Education Culture in Global Era? Retrospect and Prospect)をテーマとしたキックオフシンポジウムを12月1日に開催しました。海外から3名のゲストスピーカーを招いて実質的かつ活発な議論が行われ、プロジェクトの今後を展望するいい機会となりました。これと並行して、関連するテーマの連続講演会(現在までに4回開催)を開いて広くディスカッションの機会を設けています。

このプロジェクトは4年間の計画ですが、その間に日本語・英語による出版物の刊行や教育文化に関するアーカイブスの作成・展示など、研究科として広くその成果を発信していきたいと思っています。専門分野の研究を深化させつつ広い視野から教育を展望できる、風通しのいい開かれた研究・教育を推進する拠点になればと思っています。

新しい理論的・実践的基盤に 立った教育文化・知の継承 支援モデルの構築と展開



平成30年度教育学研究科長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長 稲垣 恭子

このたび、平成30年度研究科長賞の選考の結果、臨床実践指導学講座博士後期課程3年の岡村 裕美子さんと教育認知心理学講座博士後期課程3年の河村 悠太さんが、受賞者に選ばれました。誠におめでとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生であれば誰でも推薦することができます。7回目を迎えた今年度は、推薦期日の平成30年9月28日までに、(1)学業分野で3名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会(委員は稲垣 恭子 研究科長、楠見 孝 副研究科長、矢野 智司 副研究科長、齊藤 智 教務委員長、杉本 均 学生委員長)で、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、岡村 裕美子さんと河村 悠太さんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、研究科長賞候補者として決定しました。

岡村 裕美子さんは、本年、2編の研究論文「繰り返される言葉に耳を傾ける意味 ―統合失調症者への心理療法における意義と枠組み―」(心理臨床学研究第27巻第3号(2009年)掲載)並びに「スクールカウンセリングにおける母親への個人心理療法の有効性」(心理臨床学研究第30巻第5号(2012年)掲載)が、心理臨床の学術上優秀かつ研究奨励に値するものとして日本心理臨床学会奨励賞を受賞しました。そして、同学会第37回大会において、その奨励賞

受賞記念講演の責務を果たしました。また、臨床実践指導者として、常に他の大学院生との活動に積極的に参加しており、本研究科の名誉を高めることに大きく貢献されました。

河村 悠太さんは、教育学部時代より人を助ける行動を促進する要因を社会心理学的に解明する研究を積み重ねており、現在、京都大学デザイン学大学院連携プログラムの本科生としても活動しています。これまで、活発な学会発表に加え、進化心理学の国際誌Evolution and Human Behaviorをはじめとする国内外の査読付き学術誌に8本採択(うち5本は第一著者)されるなど、社会心理学分野の若手の第一人者として世界水準の成果をあげ、本研究科の名誉を高めることに大きく貢献されました。

両氏が今回の受賞を機にさらなる精進につとめ、教育科学の発展に寄与・貢献されますようお願いいたします。



研究科長賞



臨床実践指導学講座
博士後期課程3年

岡村 裕美子

この度は、このような大変名誉ある賞を賜り、誠にありがとうございます。本学の諸先生方、職員の皆様、学友の皆様方に心より御礼申し上げます。私は臨床心理士として、長く精神科病院臨床、また学校臨床の領域で実践を続けて参りましたが、研究の世界においてはまだまだスタートラインに立ったばかりです。このような私がこの度の栄誉に与ることができたのは、本研究科の臨床実践と研究、教育、社会貢献との往還を重視する教育風土と先生方に恵まれたおかげと深く感謝しております。

一昨年、臨床実践指導学講座の門を叩いてから、早いもので学生生活も残り半年となりました。厳しくも暖かくご指導下さる講座の先生方、全国から集まる学友との熱い討論や、日々真摯に臨床に取り組む院生の皆さんとの交流の時間は、私にとってこれまでの経験を相対化し、再び臨床活動のなかに位置付けていくための、得難く意義深い体験となりました。臨床と研究とが活発に交差する本学の環境は、社会人院生にとりまして大変貴重な場だと実感しております。この度の受賞を励みに、現場での経験を少しでも実践の知へと繋いでいくことができますよう、今後も研鑽を続けて参りたいと思います。本当にありがとうございました。

研究科長賞



教育認知心理学講座
博士後期課程3年生

河村 悠太

この度は、研究科長賞という名誉ある賞を賜り、誠に光栄に存じます。

私は教育学研究科における5年間の大学院生活を通して、人を助けるという振る舞いについて、心理学の観点から研究を行ってまいりました。「なぜ人は他者を助けるのか」という疑問自体は、学術研究に限らず日常的に抱きうるものだと思います。このような日常的な疑問にとどまらず心理学的な問いを設定し、実証研究につなげていく一連の過程は、楠見孝教授をはじめ、教育学研究科教育認知心理学講座の先生方のご指導なくしてはなし得なかったと思っております。また、常日頃から研究環境を支えてくださっているスタッフの皆様、議論に付き合ってくださいている共同研究者の皆様や講座出身の先輩方、院生の方々にも、大変感謝しております。この場をお借りしてお礼申し上げます。

研究科長賞の受賞を励みに、より一層良い研究ができるよう、今後も邁進してまいりたいと存じます。この度は本当にありがとうございました。

オープンキャンパス2018

平成30年8月9日(木)、10日(金)の両日、「京都大学オープンキャンパス2018」が開催された。

本学部においては、8月10日(金)12時30分から実施し、456名の参加者があった。

当日は、稲垣恭子 学部長による歓迎の挨拶の後、桑原知子

広報委員長による進行のもと、西岡加名恵 教授、松下姫歌 准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答が行われた。また、13時から16時まで、学生相談員が個別相談にあたり、高校生からの相談に親身に応じていた。

参加者は熱心に耳を傾けており、本年も盛況を収めた。



大学院・学部学士入学 入試説明会

平成30年6月16日(土)京都大学吉田キャンパスにおいて、平成30年6月30日(土)京都大学東京オフィス(丸の内)において大学院及び学部学士入学入試説明会が開催された。

吉田キャンパスでは、14時から齊藤智教務委員長による歓迎のあいさつの後、入試ガイダンスが行われ、関係教員や大学院学生による個別相談が実施された。

東京オフィスでは、14時から齊藤智教務委員長による歓迎の挨拶の後、服部憲児准教授によるオープニングレクチャー「教育政策に『仕掛け』をする」、入試ガイダンス及び個別相談が実施された。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。



未来の教育を担う教育学研究科にて

事務長 小西 博之



4月に教育学研究科に就任させていただき、約半年が過ぎました。

教育学研究科においては、平成30年度より、教育・行政機関、産業・医療界、社会からの要請に対応し、また、学問領域の多様化・国際化に対応するための組織再編を実施、グローバル教育人材の養成や学部教育と大学院教育の連動や分野に応じた柔軟な教育・研究体制がスタートしています。

これらに関し、大学院1専攻化やグローバル教育展開オフィスの設置等の改革の初年度にあたり、就任以来、これらにおけるサポートに関して事務サイドとしての確な対応を行う事に、とても緊張しておりましたが、皆様のご協力の下、順調な滑り出しができていますので、少し緊張の糸をほぐれさせていただいております。

5月には、国立大学法人教育学部長会議を開催させていただき、稲垣研究科長を始め各大学の研究科長におかれましては、種々の活発な意見交換が行われた盛況な会議となり、事務方としても、ほっと安堵の胸をなでおろしておりました。

一方で問題が無かった訳でもなく、万全の準備にて迎えたはずの大学院入試においても自然災害の前には無力であり、試験当日に京都を襲った大型の台風21号への対応においては、受験生の安全確保を最優先するため、入試の1週間延期という過去に例の無い対応に迫られました。

緊急の事でもあり、多くの受験生にご不便等をおかけする事になりましたが、延期の試験を滞りなく実施できたことは、ひとえに全教職員が一丸となり対応し、また、その中でも入試に携えられる先生方のご尽力のおかげと感謝しております。京都の各地でも台風による被害が発生しておりましたが、京都大学でも、大木が根こそぎ倒れ、また折れた木々の枝が散乱したキャンパスの状況を目にし、自然災害への無力さを実感させられる思いでした。

未だ就任してから、半年しか経てはおりませんが、教育学研究科の更なる教育・研究を発展させるため、また来年度に迎える創立70周年事業の開催に向けて事務部においても、できる限り尽力させていただきますので、皆様のご指導・ご協力よろしくお願いいたします。

事務室から、というより、教育研究入門の思い出を。

教務掛 森常 恭平

今年7月、学部1回生向け必修科目「教育研究入門」の研究成果報告会(ポスター発表会)を見学させていただきました。そこでは、私がかつて履修した「教育研究入門」とはかけ離れた光景が広がっていました。平成28年度の特色入試導入に伴い、教育研究入門がアクティブ・ラーニング形式へと変貌を遂げたらしいことは耳にしていたましたが、入学後半年と経っていない学生さんの「先行研究によると…」「負の相関関係にあることが分かりました」といった頼もしい発表に衝撃を受けました。

当時(=12年前(!))もしポスター発表が課せられていたとしたら…それは大困難な壁であったろうと妄想してしまう卒業生にとっては、3系の先生方によるリレー講義が懐かしいです(リレー1番手であった田中耕治先生の講義を聴き、自分が進む系は“現教”だ!!と悟ったことが思い出さ

れます)が、発表をやり遂げた1回生の皆さんはもちろんのこと、授業刷新を図った先生方の取り組みには敬服するばかりです。こうして、7月の衝撃は、私の中で当時の思い出も踏まえた歴史的な出来事となりました。

そんな思いは顔からにじみ出ていないかもしれませんが、事務職員という立場で教育学部に「舞い戻り」、日々、学生さんや先生方への正確な情報提供や、学生サービス向上に勤んでおります。今年度の研究科改組(教育学環専攻の設置)にあわせて見直しが行われた大学院入試も軌道に乗り、さらに、グローバル教育科目が後期に新設される等、学部・研究科ともに進化していく中、自分が何をなすべきか考え続けていきたいと思っております。どうか、今後とも教務掛・教職教務掛をよろしくお願いいたします。

蔵書点検つれづれ

図書掛長 吉田 弘子

図書室の仕事の1つに蔵書点検があります。京都大学では固定資産の実査を毎年度行うこととなっていますが、資産図書は全学で70万冊強もあることから、毎年度の点検が難しい場合には6年間で一巡する循環照合でもよいとなっています。今年度は6年間の3年目に当たります。京大では、点検時期は図書館・室により違いますが、休館日や利用者が少ない夏季休業期間に実施するところが多く、点検作業は、資料IDラベルを読み取り、所蔵データと照合するという方法が主流です。職員が作業を行なうところもあれば、業者に委託するところもあります。最近、店舗の棚卸専門業者がそのノウハウを使い蔵書点検を請け負うこともあり、私も依頼したことがあります。棚卸業者の説明資料に「入店時間」「閉店時間」と書かれていたり、「作業者は夜間のほうが人数を確保できますが夜間はどうか? (店舗の棚卸は閉店から翌朝の開店までの間に行なうため)」と提案されたりと、異業種の様子を垣間見ることができ面白い経験でした。

さて、教育学部図書室も毎年、夏季休業期間を中心に蔵書点検を行っています。今年の点検箇所は参考図書と7～9門でした。図書室職員4人で分担し、私は7門(芸術・美術)・8門(言語)を担当しました。読み取り機の操作に慣れてくると、1冊1冊手に取りながらの点検は、「こんな本がある」「この寄贈者印は退官された先生かな?」など思いながら、存外楽しい作業です。一方で、作業をしていると「この辺は意外に暑いんだ」と通路側と書架奥の温度差に気が付いたりもしました。

7月初旬から始めた点検作業は8月末に完了し、今年の点検箇所は不明図書0冊でした。3年間で蔵書約18万3千冊のうちの約7割、12万7千冊まで点検を終え、来年度は文庫・教科書を予定しています。どちらも教育学部図書室の特色ある資料なので、不明図書0冊であることを願いつつ、1冊ずつ本を手取る作業を楽しみにしています。

諸記録

おもな出来事(H30.4.1-10.31)

4月

12日(木) グローバル教育展開オフィス

Special Opening Lecture 2018,
レクチャーシリーズ第1回 荻谷剛彦教授講演会
「オックスフォードから見たくニッポンの教育」社会学的アプローチ
(総合研究2号館)

20日(金) 滋賀県立膳所高等学校 特別授業「実習を通して学ぶ臨床心理学」(講師:桑原知子教授)
(総合研究1号館)

6月

5日(火) 高大連携:SGH課題研究セミナー

(対象:福岡県立京都高等学校1年生)

6日(水) レクチャーシリーズ第2回 Erno Lehtinen教授講演会
「Research-based Development of Finnish Education」
(教育学部本館)

7日(木) 教育実践コラボレーション・センター
第26回知的コラボの会「世界市民的教育のポテンシャル」(講師:広瀬悠三准教授)
(教育学部本館)

7月

29日(日) こころの支援室

「花山天文台ツアー 宇宙船を作ろう!&和・話・輪の会」
(理学研究科附属花山天文台)

8月

17日(金)、18日(土) 教育実践コラボレーション・センター

E.FORUM 全国スクールリーダー育成研修
(法経済学部本館1階 法経第四教室 ほか)

19日(日) 附属臨床教育実践研究センター

第22回リカレント教育講座「『心の教育』を考えるー教師のメンタルヘルスー」
(百周年時計台記念館)

10月

5日(金) レクチャーシリーズ第3回 Hanna Dumont上級研究員

「Opportunities and Risks of Parental Homework Involvement:
Insights from Germany and Switzerland」
(教育学部本館)

人事異動(H30.5.1-H30.10.31)

平成30年6月30日		
木田 綾菜	教務補佐員(教育認知心理学)	任期满了
平成30年8月16日		
金子 迪大	研究員(教育方法学)	採用
平成30年9月30日		
	派遣職員(総務掛)	任期满了

平成30年10月1日		
梅村 高太郎	講師(臨床心理学)	採用
辻 幸代	掛長(教務掛)	
	総合生存学館教務掛長へ配置換	
宇野 純子	掛長(教務掛)	
	総合生存学館教務掛長より配置換	
	技術補佐員(教育・人間科学)	採用
	教務補佐員(教育・人間科学)	採用
	教務補佐員(教育認知心理学)	採用
	事務補佐員(地域連携教育推進連携ユニット)	採用
平成30年10月23日		
	派遣職員(総務掛)	採用

外部資金受入れ(H30年度)

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
批判的犯罪学の観点をふまえた非行からの離脱過程に関する研究	公益財団法人 京都大学教育研究振興財団	岡邊 健
自発性を育む保育が子どもの自己制御能力に与える影響	公益財団法人 前川財団	森口 佑介
妊娠期からの女性の生理・心理面の変化とその個人差	公益財団法人 前川財団	明和 政子
父親の養育脳の発達プロセスとその個人差に関する神経生理的研究	公益財団法人 前川財団	田中 友香理
福島第一原発事故による食品放射線リスクへの態度の縦断研究	公益社団法人 日本心理学会	楠見 孝

◎受託研究

研究題目	寄附者	担当者
「活力ある生涯のためのLast5Xイノベーション」拠点 女性と子どものこころとからだの健康サポート	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子

教育学研究科・教育学部基金(詳細はP14)

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。(公開をご希望されない方については、掲載していません。)

葛尾 創	西尾 新	松岡 隆	森本 洋介
高木 枝美子	廣瀬 直哉	森田 正信	

(五十音順)

平成30年10月31日現在

新任教員・事務職員紹介



梅村 高太郎

講師

10月に着任いたしました。臨床実践に基づいて思春期の心理療法について研究しています。教育、研究に精一杯取り組んでいきたいと思ひます。

所 属 臨床心理学講座
専 門 心理臨床学

宇野 純子

掛長

10月1日付で教務掛に配置換となりました。学部教務の事務に携わることが初めてですが、早く慣れて、お役に立てるよう頑張ります。どうぞよろしくお願い致します。

所属掛 教務掛

教育学研究科・教育学部基金

ー未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みますー

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場などが育っていくあらゆる場面を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しまし

た。本基金では、研究の成果を現場（フィールド）に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

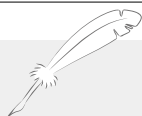
基金の使途：

項 目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

編集後記



着任早々のお役目で、皆さまに頼りどおしの作業でした。その間、困っていると誰かが手を差し伸べてくださる、温かく建設的な本研究科の雰囲気を感じることができました。

加えて目を見張ったのは、ご覧のとおり、執筆陣、編集陣における「女性率」の高さ——むろん意図的なものではなく、偶然の結果です。20代のころ、古典的な男女格差など気にすること自体がカッコ悪いと考えていました。そう思い込めるほど環境に恵まれていたのです。しかし、経験を重ね、「数の力」には意味があること、そして、各世代の女性たちが、自身の前を歩く同性のロールモデルを持つことの重要性を、痛感しています。その点でも、本研究科はすばらしい! と思ひます。(真)



京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長 佐野 真由子 教授（教育社会学講座）
委 員 稲垣 恭子 教授（教育学研究科長・教育学部長）
委 員 西岡 加名恵 教授（教育・人間科学講座）
委 員 松下 姫歌 准教授（連携教育学講座（附属臨床教育実践研究センター））
委 員 小西 博之 事務長
委 員 鞠 尚子 総務掛長
委 員 宇野 純子 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>